

班長教室 1 班長について

宗門は今、「佛立菩薩を育てよう。班長育成・班づくり推進」のご祈願を立て、妙法の御利益を顕すご信者を「育てる人」の養成を呼びかけています。

ここで言う「班長」は、組織の上では組長(部長)を補佐して数軒のご信者を担当し、育成を行なう役中さんです。しかし佛立信心の上から言えば、他のご信者の幸せのために時間や労力を裂いてご奉公される、ご弘通の最前線の「菩薩行の実践者」と言えます。

そもそも、「自分のお願いのための口唱しかしない」「他人のことまで構えない」と言うのでは、法華経の説く功德行に反します。「妙法の功德で他の人を幸せに導く」という究極の菩薩行の中に、自己の罪障は消滅し、自他安穩の御利益が顕れるのですから、そんな佛立信心を学ぶお互いは、本来皆「班長」として、他のご信者のお世話をさせていただけるようにならねばなりません。

このご奉公は、そんな佛立信心の原点を再確認し、次世代のためのご弘通の基盤を固める大事なものです。身近なご信者を誘い合い、「班長」のご奉公に挑戦しましょう。

[育能力]

「教化子が育たない」「後続の役中が出てこない」「法灯相続ができない」……。そんな悩みを抱えている方はいらっしゃいませんか？ 原因の一つに、「育てる力」が落ちていることが考えられます。

人を育てる基本は、相手の身になってお世話をしてあげることです。この「お世話」は時間がかかります。手間もかかります。根気や情熱が必要です。そしてこれを嫌えば、一人の人を育てることは叶いません。時代は即効性を求めますので、時間や労力をかけて人を育てることが疎かになりがちです。出来る人、気心の知れた人と和気藹々に過ごすのは楽なのです。しかしここに、自分のご信心を他の人に移せなくする落とし穴があります。

手間隙かけるお世話は、自己を鍛え、自他を共に成長させます。部下を持って責任感を増す人や、子供を生んで母親の顔になる人など、これらは人のお世話を通して、自身を逞しく変えている事例です。佛立信心の場合は特に、「凡夫が菩薩へと育つ」ところに意味があるのですから、初心の方を慈悲の心で育成させていただくご奉公は不可欠なのです。

さあ、あなたも「班長」のご奉公に挑戦しましょう。そして他のご信者が御題目を唱えられるように、ご参詣ができるようにと、根気よくお世話をさせていただきます。他の人を育てる中には、多くの学びと喜びがあります。つまり他の人のために尽す育成は自身のご信心を深め、その時間や労力が我が身を飾る功德となるのです。

[開導聖人御指南]

当講内は初心の人をそだつるを第一と心得べき也。初心が後心になるもの也。(扇全3巻11頁)

[開導聖人御教歌]

をしへ子が皆みをしへにしたがはば いかによれしと祖師やおぼさむ

班長教室 2 班長の役割

昨年度は班長の役割として、「共にお看経をさせていただくこと」と、「ご奉公の機会にお誘いすること」を呼びかけました。今年はそれに「巡回のお助行をさせていただくこと」を心掛けていただくことをお勧めしています。

[共にお看経をさせていただく]

本門佛立宗のご信心は、御題目の口唱で現証ご利益を顕す信行が一番の基本です。しかし、最初から御本尊をしっかり拝み、大きな声で御題目が唱えられる方は多くありません。御題目の唱え方を教わらずにいると、何年もご信心をしながら、ボソボソ、モゴモゴとしかお看経のできない人もいます。

ですから、しっかりと御題目が唱えられるようになるまで、お寺や御講席、あるいは相手の方の家の御宝前で、たびたび一緒にお看経をさせていただきます。身をもってお看経の姿を教えることで、自身の口唱行も磨かれます。

[御奉公の機会にお誘いさせていただく]

お寺や御講に参詣する際に、自分だけが参るのではなく、班内のご信者もお誘いする努力をしましょう。また、当番や御有志などのご奉公の機会にも、功德を積むための参加を勧めましょう。これらは工夫が必要で、手間や時間も取られますが、自分のご奉公で手一杯の状態から、他の人に功德を積んでいただくために心と身体と口が動くようになれば、自身の「菩薩行」も磨かれます。

[班内の巡回助行]

他のご信者の家に出向き、その家のご家族がご信心の有難さを知って幸せになれるよう御題目をお唱えさせていただくのが「お助行」ですから、これは大功德を得る大事な菩薩行です。『巡回助行の記録』を手に、毎月確実にお看経に出向きましょう。

- 班長以上の役中さんは、基本的に助行誓願者です。毎月の目標を立てて実践しましょう。
- 内容はお教化の激励助行、病人さんへのお助行等を含めても結構ですが、基本は班内信徒宅をムラなく巡回させていただく育成助行です。
- 育成助行は相手に負担をかけず、長く継続することが大事です。大勢で伺わない。ご供養等の準備をさせない。長居をしないなど、続けるための配慮をしましょう。
- 喜んでお助行を受けていただける工夫もしましょう。他の方にお看経に来ていただく有難さを教えたり、お看経のあとで御利益談を一つ紹介するのも良いでしょう。

[開導聖人御指南]

人を助けんと思ふ口唱が、却て我身の為となる也。(扇全 14 巻 432 頁)

[開導聖人御教歌]

おのが身の為の口唱の万遍は 法のところに叶はざりけり

班長教室 3 お寺参詣にお誘いする

古来「お寺」はみ仏の教えを学び、その教えを身に修めるために修行をし、「滅罪生善に努める場所」と説明される聖地です。

そもそも私たちのお寺は、妙法のご利益を得たご信者が浄志を集め、堂舎を建立されたのがはじまりです。そこには日々、御法門を聴聞し、妙法の口唱に努めてご信心を磨くことだけを目的にご信者が参詣し、ご奉公に励みます。つまりお寺は、生活の場に御宝前を迎える家庭とはまったく異なる、ご信者の篤いご信心で荘厳された清浄な場所なのです。しかも奉安される御本尊は、真実の大法、現証を顕す妙法五字なのですから、先師は「お寺は功德の溢れる宝の山。そこに一步足を踏み入れるだけで功德をいただける」とお寺参詣を勧められました。お寺参詣がご利益をいただく基本である所以です。

ただし開導聖人は、「寺あり。何のために建てたるや。弘通処なり(中略)上行所伝の五字ばかりを弘めんがために建てたる寺なりと領解すべし」(扇全 18 巻 392 頁)と仰せになり、仏法が説かれ目的を考えれば、本門佛立宗の寺院はすべての人の幸福を実現するための、上行所伝の御題目を弘める拠点にならねばならないと御指南されています。如来のお使い、佛立菩薩を育てる聖地が本門佛立宗の寺院と心得、参詣将引に努めましょう。

[連れ参詣に励みましよう]

お寺は佛立菩薩を育てる道場です。新しいご信者をお寺参詣に誘えば、それだけでも御法の徳をいただいでご信心が身に付きます。更に工夫して、御法門聴聞の機会やご奉公の場にお誘いすれば、それがご信心を覚えていただく近道になるのです。

- 法華経の随喜功德品には、「共に往いて聴くべし」と他の人を誘ってご参詣する功德の深さが説かれます。お寺に参るときは、必ず誰かを誘う習慣を身につけましょう。
- お寺の行事や参詣の機会は早めに連絡し、相手の方が予定を取りやすいよう配慮します。行事を記した書類を渡すだけで済ましたり、間際になってからの将引は感心しません。
- お寺参詣に馴れない方は、迎えに行ったり待ち合わせをする「ひと手間」が大事です。また、他のご信者に紹介したり、受付の仕方を教えるなど、お寺に馴染む手助けもしましょう。もちろん他の方が初心のご信者を連れ参詣しているのに出逢えば、こちらから「ありがとうございます」と気さくに声をかけてあげるのも大切なご奉公です。
- 個人御本尊(懐中御本尊)を護持される個人入信の方は、家庭に御宝前をお迎えして、お給仕の徳をいただくことができないご信者でもあります。お寺を我が家の御宝前と思い、口唱やお給仕を精一杯させていただくことを教えましょう。

[開導聖人御指南]

寺を建立するは弘通所なり。転法輪の処なり。本尊を安置し、参詣せしめて、法を聴聞せしめんがためなり。ほかのことなし。(扇全 27 巻 296 頁)

[開導聖人御教歌]

たてそめし仏の御堂このたびは 仏のたつる寺と成にけり

班長教室 4 朝参詣の功德を教える

本門佛立宗の寺院は、全国どこでも「朝参詣」から一日が始まります。朝参詣は、新しい一日が「元氣にご奉公を勤める時間となりますように」と祈る場であり、同時に私たちのご信心の緩み(懈怠)を引き締め、菩薩心に磨きをかけるひとときでもあるのです。

ただし、多くの人にとって早朝の時間は、一分一秒を惜しむ慌しいものでもあります。勤めや学校に出掛ける準備に追われ、朝食の時間さえ省く人もいます。増してご信者の場合は、我が家の御宝前にお給仕し、ご法味の口唱を供える時間も必要ですので、その上でお寺参詣をさせていただく時間を確保するのは容易なことではありません。しかし、それだけに「お寺の御宝前に朝のご挨拶に伺わねば……」と思い、工夫して朝参詣に努めるご信心には、大きな功德が生まれます。つまり朝参詣は、新しいご信者がご信心を学ぶ最高のご奉公機会です。朝参詣の習慣が身に付くよう連れ参詣をしましょう。

[朝参詣の功德]

朝参詣に励めば、いろいろな功德をいただくことができます。

- ご信心の大敵は「懈怠煩惱」で、油断をすれば「安きに流れる」自己流のご信心がすぐに芽吹くの凡夫です。毎朝お寺参詣に努めれば、そんな懈怠煩惱を退治できます。
- 「声を惜しまず」大きな声で口唱すれば、雑念のないお看経ができます。しかし家庭では、周りへの気遣いや生活の匂いが邪魔して口唱に集中するのが困難です。毎朝の本堂での口唱は、一日の初めに全力で御題目をお唱えする貴重な時間でもあります。
- 朝参詣では、毎日私たちのご祈願を御導師が御宝前に言上くださり、参詣者が祈願成就のために御題目を唱えてくださいます。有縁の方への回向もしていただけます。
- 多くの本門佛立宗のお寺では、毎朝御法門が聴聞できます。一日のはじめに一首の開導聖人の御教歌を学んでご信心を引き締め、ご信心の悪癖を修正できます。
- 朝参詣には、御宝前や御導師へのお給仕、参詣者の受付、お掃除など、様々なご奉公の機会がありますので、毎朝簡単に「身の功德」を積むことができます。
- 朝参詣には、真面目にご信心に取り組む素晴らしいご信者が集います。この「善友」とのふれあいが、自身のご信心を増進させます。
- 朝参詣をすると、ご信者がお互いに「ありがとうございます」と笑顔で挨拶を交わします。朝一番に交わす佛立信者のご挨拶は、確実に感謝の心を育てます。
- 一日の最初にお寺の御宝前に口唱を捧げるご信心で、一日を無事息災に過ごす御法のご加護をいただくことができます。
- もちろん、そんな朝参詣に真面目に取り組めば、現証のご利益が速やかにいただけます。

[開導聖人御指南]

「朝参り日参のお人は真の信者也」(扇全 6 巻 209 頁)

[開導聖人御教歌]

朝起はなる程妙な徳がある して見ぬ人はこれもわからず

班長教室 5 総講・御修行参詣にお誘いする

毎日のお寺参詣、特に朝参詣にお誘いできれば、すでに育成のなかばは成就したとみてよいのですが、いろいろな事情で「毎日は難しい」という方もあると思います。しかし、ここで諦めては、せっかく入信を決意した尊い浄志も崩れかねません。凡夫がみ仏の心に近づくには、生活の中でお寺参詣をさせていただきリズムを確立することが重要なのです。

そこで毎日のご参詣が難しい方には、お仕事の休みの日や有縁の方のご命日など、日を決めてご参詣させていただくことをお勧めしましょう。

もちろん、日にちを決めてお寺参詣に勤める中で、功德の大きいのは総講・御修行日です。班内信徒にぜひその意味を教えて、意識してご参詣に励めるよう育成しましょう。

〔御修行・総講について〕

- 本門佛立宗では、み仏の正しいご信心を学ぶ場を「御講」と呼びます。この「御講」は、ご信心を学びたいと願うご信者が願主となり、お教務方をお招きして勤められますが、たくさんの願主が合同で勤める場合は「総講」と呼ばれ、のちにお寺が先師のご命日等に勤める法要のことを「総講」または「御修行」と呼ぶようになりました。
- 毎月の月初めには、一か月間、健康で無事にご奉公が勤められるようご祈願させていただく「月始総講」が奉修されます。ご信心では、ちょうど竹が節を持つことで強靱かつしなやかになるように、節目を大事にすることを教わりますが、月が変わるごとにご信心を点検し、引き締める習慣が付けば、ご信心は格段に成長します。月始総講には前月の無事ご奉公成就の御礼をし、一か月のご奉公成就をご祈願させていただきます。
- お祖師さま(高祖日蓮大士)や門祖日隆聖人、開導日扇聖人も、正しい教えを伝えてくださった先師のご命日には「御講」を勤められていました。本門佛立宗の寺院では、現在、このお祖師さま、門祖日隆聖人、開導日扇聖人の「三祖」ご命日(またはその前日)に、大恩ある三祖報恩のための総講(または御修行)が勤められています。
- お祖師さまのご命日は13日、門祖日隆聖人のご命日は25日、開導日扇聖人のご命日は17日です。日程表(御講付)で奉修時間を確認してご参詣しましょう。
- 寺院によっては、有縁の先師のご命日に合わせて、別に総講(または御修行)が勤まります。今日のご奉公環境を築くためにご苦勞された先師の事績を学び、報恩の参詣に努めましょう。
- 総講(または御修行)は特別な参詣日です。特別な思いをお教化成就に託し、また御宝前へのお供えやお花料として奉納させていただけば、更に大きな功德が積めます。

〔開導聖人御指南〕

御修行日は講内諸組の面々、無事に信行つかまつりおり候のよろこびを、三宝への御礼参り也。

(扇全 14 巻 216 頁)

〔開導聖人御教歌〕

故郷へは錦をかざれ花の春 祖師の御前に開く総講

班長教室 6 御会式の大事を教える

一生懸命にお誘いするのですが、どうしてもお寺参詣のできないご信者もあります。忙しい人、家がお寺から遠い人、そして「やる気」がもうひとつ欠ける人……。

しかしどんな事情があっても、私たちの「教えの親」である三祖報恩の御会式だけは、万難を排してご参詣させていただくのが佛立信者です。開導聖人は「我等のためには今日ほどうれしき、めでたく大事大切なる日はなく候。いかにとならば、歳に一度、一日の御会式なり」(扇全 8 巻 93 頁)と御会式を心待ちにする佛立信者の心を教えています。御会式の大事を知り、精一杯ご奉公させていただけるご信心を育てましょう。

〔御会式について〕

- お祖師さまご入滅直後より、そのご遺徳を偲ぶ弟子・信徒によって、ご年忌の法要は厳格に勤められたようで、これが御会式の起こりです。お祖師さまの門下には、六老僧の日頂師が、十三回忌遅参を理由に父日常師に勘当された「泣き銀杏」の故事が伝わります。ご命日に集う報恩の参詣は、当時から最重要視されていたのです。
- 現在、本門佛立宗では、お祖師さまの祥月ご命日(10月13日)の前後に営む御会式(高祖会)のほか、室町時代にお祖師さまの教えを再興された門祖日隆聖人の祥月ご命日(2月25日)の前後に門祖会(御開山会)を、また蓮隆両祖の教えを正しく継承された佛立開導日扇聖人の祥月ご命日(7月17日)の前後に開導会(御正当会)を奉修し、この三つの法要を三大会と呼んでいます。
- 三大会は所属の全信徒が願主となり、お祖師さまや門祖聖人、開導聖人にお喜びいただくために集うのですから、教え子の私たち一人ひとりが功德を積み、信心を高める場とならなければなりません。お客さん気分は禁物です。
- そのためにはまずお教化の成就を目指しましょう。なぜなら「新たにお祖師さまの教えを学ぶ信者が生まれました」とご報告できることが、そのご生涯をご弘通教化に懸けられたお祖師さま、門祖聖人、開導聖人の、最も喜ばれるご奉公となるからです。
- ほかに、多くの信徒が報恩の口唱を御供えできるよう、隅々まで奨引すること。御会式前の清掃奉仕や諸準備、気持ち良いお天気で参詣者を迎えるための無事奉修祈願等、精一杯ご奉公させていただくことで大きな功德を身に得るよう教えましょう。
- 当日は有徳の御導師をお招きして唱導いただきます。御法門をしっかり聴聞して信心の改良・増進に努めましょう。ご奉公者の場合は、参詣者が気持ちよくお参りできるよう、笑顔を忘れずハキハキ、キビキビとご奉公に臨むことも、功德を得る大事な心得です。

〔開導聖人御指南〕

例月の御講、御会式、御開山会等を喜び勇んで、家内中が祭りをするべきなり。(扇全 13 巻 422 頁)

〔開導聖人御教歌〕

授かりしみのりの親のめぐみをば わすれぬ人を教へ子といふ

班長教室 7 清掃奉仕の功德を教える

本門佛立宗のお寺は、私たちがご信心を鍛え、ご利益のいただき方を学び、菩薩行を身に付けるための道場です。せっかくお寺参詣をし、御法の徳をいただいて帰るのですから、「なにか自分の出来ることをさせていただいて、御法のお役に立たせていただこう」と行動を起こせば、一回のご参詣が、より有意義な内容となります。

ただ、お寺参詣に慣れない方は、勝手に物に触れることすら躊躇すると思います。そこで手始めに、お掃除の功德を教えましょう。簡単なお掃除なら誰でも出来ますし、誰の迷惑にもなりません。時間も手間もかからない、罪障消滅にもなる身近な功德行なのです。

【お掃除について】

- 仏さまは最も愚鈍なお弟子の須梨槃特に一本の箒を与え、毎日「塵を払い、垢を除かん」と口ずさみながらお掃除をさせることで悟りへと導かれました。このことは仏道修行としてのお掃除が、単に「汚れている場所をきれいにする」行為ではなく、「心の垢を清める修行」であることを教えています。
- 開導聖人は「仏前の掃除、香華、供養等、皆自然成仏道と説かれたり。この人、未来世娑婆に出て菩薩行をせん時、無量の福德を得て、無病息災にして人を助くべしと説かれたり」（扇全 15 巻 416 頁）と御指南されています。直接御宝前のお給仕がさせていただければ、それが一番結構ですが、本堂内の椅子を並べたり、お供水のコップを洗ったりするのも立派な「仏前のお掃除」です。
- お寺は「生きてましますみ仏のお住まい」ですから、廊下に掃除機をかけても、境内の草引きをしても、すべて「み仏へのお給仕」になります。
- 誰もが嫌がる場所、たとえばトイレのお掃除などは、逆に最もご利益に近い、功德の積める場所でもあります。罪障消滅を願うご奉公の仕方を教えましょう。
- 誰も気付かないことであっても感謝や見返りを求めず、コツコツとご奉公させていただくことを「陰徳を積む」と言います。見返りを求めず、他のために役立てるのは菩薩の基本ですが、お寺参詣の際に簡単なお掃除をさせていただく習慣は菩薩心を磨き、その積み重ねが「陰徳」となって自らの果報を大きく膨らませます。
- お寺のお掃除をさせていただくことで、お寺への愛着が生まれれば、ご奉公の姿勢も変わります。「他所に訪ねていく」ような感覚から、「私の大切なお寺」という自覚へと気持ちに移れば、それが佛立菩薩への階段を昇る大きな一歩となるのです。

【開導聖人御指南】

寺参りをたのしむに二つあり。遊びに行くと、罪滅の為と。(中略)ご弘通の為と、楽しみ遊ぶと。一つは信者、ひとつは不信者なり。(扇全 14 巻 229 頁)

【開導聖人御教歌】

成丈の分相應の御奉公 かげひなたなく骨をしみなし

班長教室 8 ご奉公当番への参加を勧める

ご信心の幅を広げ、いろいろな角度から功德が積めるようになるには、お寺のご奉公当番に参加するのが早道です。班内のご信者と一対一で話し合いながらご信心を教えるのも大切なことですが、様々な立場のご信者が、いろんな思いで参加するご奉公の現場は、身を置くことで「生きた教科書」からの新たなご信心の境地が学べます。

時間のあるときや気の向いたときにさせていただくご奉公に比べて、当番を務めることは責任感を育て、苦手な分野も克服でき、時間のやり繰りも上手になって、自らの可能性をどんどん引き出します。身近なところからご奉公当番への参加を勧めましょう。

【ご奉公者の育成】

- ご奉公当番は、私たちのお寺が、より機能的な弘通活動を行うために組まれています。つまり、私たち一人ひとりのご奉公参加が、より多くの方へと妙法のご利益を届けることに繋がるのです。自分の好みでご奉公を選ばず、「御宝前から功德を積むチャンスをいただいた」と受け止めて、いただいたご奉公を精一杯努める大事を教えましょう。
- 新しいご信者に、ご奉公に参加する「時期」はありません。「まだ早い」と思うのは教える側の勝手な判断で、新入信徒や若手のご信者でも、積極的にご奉公に参加してご利益をいただく方はたくさんいます。ご奉公は理屈を学んで務めるものではなく、させていただく中で「ご信心を学ぶ場」なのです。
- ご奉公を勧めたいのですが、仕事や家庭の事情があつて「物理的に時間がない」という方や体力的に無理と思われる方、体調の優れない方、あるいは「どう見ても不向き」と見える方などへは、勧めることをためらいます。しかし、無理な部分を御法のお力添えをいただいて、「出来るようにしていただく」のが妙法のご信心です。そもそもご奉公は、他の人と同じ成果を求めるものではありません。御法のために「させていただこう」という気持ちを育て、誠心誠意努力をする姿勢を養うことが大切なのです。
- ご奉公を通じて功德行を教えるには、何より良いお手本が必要です。教える側の私たちが喜んでご奉公を受け、楽しんでご奉公を務めることで、佛立菩薩を育てるご奉公環境は整います。「よいご奉公者を生み出す環境づくり」は、自身のご信心も鍛えます。
- 「ご奉公者がいない」という声を聞くことがあります。妙法弘通のために自分の時間や労力を捧げるとご奉公者は、ただ待っていても現われません。御法のために喜んでご奉公のできるご信者へと「育てる努力」を怠っていないか、確認させていただきましょう。

【開導聖人御指南】

この経の行者、このたびは強盛の大信力を起こして、ご奉公を第一の楽しみとしたまえよ。

(扇全 14 巻 404 頁)

【開導聖人御教歌】

妙法にあひぬる上は御奉公 これより外にたのしみはなし

班長教室 9 ご有志奉納の功德を勧める

仏教では古来、仏陀へ供物を供えることで感謝・報恩の「志」を表してきました。そして同時にそれは、罪障の消滅を願い、功德を積むための重要な修行のひとつでもありました。なぜなら、物への執着は正しい心を失わせる迷いの因であり、逆に喜んで仏陀や教団に財物を施す施行には、そんな執着心を離れて苦の因を去らせる働きがあるからです。

こうした仏教教団の善き伝統は、お寺参詣の際にさまざまなご有志奉納の機会があることで、本門佛立宗の寺院の中に生きています。ただし、現代社会は「お金」を土台としますので、御宝前への奉納も「お金」を中心としたものになってきています。この「お金」は、最も執着の対象となるものでもあります。「お金」を上手に功德に変え、ご利益の因とすご奉公の仕方を教えましょう。

【ご有志奉納の心得】

- お寺の御宝前にさせていただく各種の奉納を、総じて「ご有志」と言います。読んで字のごとく、精一杯の気持ち(志)を込めて御宝前にお供えさせていただきます。
- 「まず御宝前に……」という気持ちでお供えさせていただくことを「お初穂の信心」と言います。ご有志は自分の生活に使った「残り」を御宝前に供えるのではなく、最初に御宝前へのお供えを取らせていただくと功德が増し、不思議と家計も好転します。
- 人生の節目等を迎えたときも、御宝前のお陰を感謝し、特別なご有志を奉納しましょう。家の新築、御戒壇の建立、昇進、子どもや孫の誕生、結婚記念日、親の年忌を迎えたときなど、常に御宝前のお陰を思い、まずその気持ちをお供えさせていただくのです。
- 昔は現物で供えていましたが、時代の変化と共に「お金」で奉納する形に代わったものに「お花料」「お灯明料(お油料)」「仏餉米料」「お供物料」といった「料」の字が付く奉納があります(もちろん現物で供える寺院もあります)。それぞれ本来の意味をよく教え、たとえ小額でも心を込めることを教えましょう。ちなみに「お灯明料(お油料)」は仏の智慧を表す灯明を供える供養、「仏餉米料」は主食のお米を供えるご奉公です。
- 「お金」で奉納する際、安易に受付でポケットからクシャクシャのお金を出して「支払う」ような感覚は厳禁です。世間の慶事の際も、多くの人が触ったお金は不浄として新札を用意するのがマナーとされます。功德行を学ぶご信者は「金額が同じなら良い」ではなく、金封や新札を用意し、筆で丁寧に表書きするところから「志」は始まっていると心得ましょう。
- 何かの記念に、物品でご有志をされるのも結構です。ただしその際は、永くお寺で大事に使っていただけるよう、あらかじめ御導師や事務局に相談させていただきます。

【開導聖人御指南】

世財を以って娑婆逗留中の弘通の御用に用うる心ある人なれば、これを福人とも申す。その意に貪なし。苦なし。(扇全 14 巻 195 頁)

【開導聖人御教歌】

御初穂は第六天に奉り 仏に上げる己が残物

班長教室 10 御講参詣を勧める

本門佛立宗には、お寺と共に重要な信行練磨の道場があります。それが、ご信者宅で奉修される御講です。そもそも凡夫はどんなに賢くても、仏の智慧を自ら悟ることはできません。功德を積む道も、罪障を滅する道も、法を聞くことで初めて知るのですが、そんな御法門の聴聞の場が御講です。また罪深い凡夫は、教えを知りながらも気付くと煩惱の垢に心を染めます。御講参詣は、そんな心の汚れを落とし、清らかな信心を持つ場でもあります。

佛立信心は御講に参詣する中に養われます。御講参詣が出来る信徒へと育成しましょう。

[御講参詣の心得]

御講参詣の基本的な心得を、開導聖人の御指南(扇全 10 巻 217 頁)からあげてみます。

- 開導聖人は、「どの席で勤まる御講も、遠い近いを口にして参詣を選ばないこと」と、まずは喜んで御講席に向かう姿勢が大事なことを教えています。その一方で、「お付き合いで参る参詣」「ご供養目当ての参詣」等を誠められるのは、義務的に渋々参るのではなく、御講が勤まると聞けば、どこでも喜んで飛んでいくようなご信心の中に、御利益が顕れることを教えておられるのです。御講参詣を重ねることで我が身の罪障を滅し、身に徳を得る道が開かれます。御講参詣を心待ちにするご信心を育てましょう。
- また「お導師より遅れずに参る」「お席に着けば、無駄な話を禁じて口唱して待つ」等、緊張感のある参詣姿勢も求められています。早くから参詣の準備が出来るのも、すぐに口唱を始めるのも、御講参詣を大事に思うご信心の現われと心得ましょう。
- 御講参詣の第一の目的は、御法門を聴聞してご信心を磨くことにあります。ですから「御法門は最初から聴聞すること」と、途中参加の中途半端な聴聞を誠められています。また「御法門中は入室しない」「御法門中は御宝前のお給仕さえ控える」等と、聴衆の集中力を妨げる行為は、堅く慎むようにもご指導されています。御法門をしっかりと聴聞して帰るのが何より大事なことを教えましょう。
- 御講参詣をしてトラブルが起こると、「せっかく参詣したのに……」とグチを言う人も出るでしょうし、それがこじれると御法に傷をつける「当講の恥辱」にもなりかねません。開導聖人が「忘れ物をしない」「履物を間違えない」といった濃やかな注意をされているのは、皆が気持ちよく参詣するために細心の注意を払うよう教えているのです。
- 「くれぐれも自堕落にすまじく候」とも記されています。佛立菩薩道を修める道場への参詣です。キビキビと礼儀正しく参詣しましょう。

[開導聖人御指南]

御講席は派出所の如し。弘通処なり。折伏教化のところなり。講内信者の参詣は、ご弘通の御奉公なり。

(扇全 17 巻 334 頁)

[開導聖人御教歌]

講中と成て御講へ参らねば 講の外なる人にかはらず

班長教室 11 御講参詣の功德を教える

本門佛立宗の御講には、一席の参詣の中に実に多くの功德の種が包まれています。仏法を学ぶだけなら、講義だけ聴けばよさそうなものですが、私たちの御講が口唱やお給仕、外護といった様々な要素を複合して一席になるのは、聞いて頭で理解するだけでは、ほんものの功德が生まれないことを教えているのです。御講の中の一つひとつの功德の意味をよく理解し、班内のご信者に「御講参詣が御利益感得の因」であることを教え、喜んで参詣できる信者へとお育てしましょう。

〔御講参詣の功德〕

- 開導聖人は御講席を「弘通の道場」と仰せになり、「御講席はサビ刀を研ぐ場所と心得べき也」（扇全 11 卷 93 頁）と教えられました。いつでも鮮やかな現証を顕せるご信心は、日頃の手入れや鍛錬が大事です。如来のお遣いを育てる道場に通り、煩惱の垢を落としていただく気持ちから、御講参詣の一切の功德は始まります。
- 御講は御法門聴聞の場です。開導聖人の御教歌を通して、正しい功德の積み方、罪障の滅し方を学ぶことは、佛立信心の第一歩ですから、聴聞の仕方は重要です。「自分の考えをはさまず素直に聴く」「実践するために聴く」「他に伝えるために聴く」等、開導聖人の戒めを守り、聴聞の徳、信心改良の徳、転教の徳をいただきます。
- 実際に御講に参詣するには、参詣のための時間を確保し、身体を使います。お布施もしますし、交通費等がかかる場合もあります。この身命財を使ったご奉公から、身の徳（健康の果報）、命の徳（時間などの果報）、財の徳（経済的な果報）が生まれるのです。
- 御講参詣に励む姿は、同信のご信者はもちろん、周囲の宗外者も見ています。そしてそれは、目に見えた信心の在り方を示す「事相の折伏」にもなっています。真剣な参詣姿勢からは、折伏の徳もいただけます。
- 御講参詣をすると、他のご信者のご奉公の様子を耳にします。また、いろんなご奉公のご披露も聞きます。これらは、新たなご奉公の仕方や機会を教わっているのですから、挑戦していけば自身のご信心の幅を広げる徳がいただけます。
- 御講に参りたくても、仕事やいろんな事情があつて、どうしても都合がつかない場合もあるでしょう。ただし、開導聖人は、御講参詣ができるのも、自身のご信心を改良させる御法門が聴聞できるのも、その人の持つ果報であると仰せです。「参れないのは仕方ない」と思うのではなく、「参詣できる果報をいただこう」と自らのご信心を高めることも、御講参詣の出来る信者となるための大事な心得です。

〔開導聖人御指南〕

今夜は御講なりと知りつつ不参は、これ謗法なり。きはざれども嫌うに似たり。よぎなき事あらば、懺悔して口唱したまへ。（扇全 16 卷 113 頁）

〔開導聖人御教歌〕

お講には参れば参る参らねば そんといふことしらぬ罪障

班長教室 12 御講席主の功德を教える

在家の信徒宅は、そもそも娑婆の営みを第一義とする場所ですが、法華経には妙法の御本尊が奉安されれば、たちまち清浄な道場となることが説かれています。本門佛立宗の御講は、そこにお教務さんを招いて妙法のご信心を説いていただき、聴衆を集めて教えを学ぶことで、生活の場を妙法弘通の道場へと功德化する役割を果たすのです。ですから佛立信者は、それぞれの果報で住まう我が家が「ご弘通の道場」として活用されることを喜び、進んで御講の席主となれるよう育成されなければなりません。

〔御講奉修の功德〕

- 開導聖人は「講主の本意は先祖を弔い、または家の祈祷、または弘通の御為也。その功、家に帰す」(扇全八巻一二四頁)と仰せです。また、人々に法を聞かshめて弘通の道場とする功德で、ご先祖への供養や家庭内の安穩が得られるとも教えておられます(扇全13巻313頁)。我が家の繁栄を願うのであれば、まず家が御法の功德で飾られることが大事です。我が家をご弘通に役立てる御講の席主は、そんな功德をいただけます。
- 御講を奉修するには、お迎えするお教務さんに日程をいただき、多くの参詣がいただけるようご信者を将引し、また御宝前を荘厳して家の中を掃除するなど、さまざまな準備をします。数日前から晴天祈願をする人もあります。手をかけるほど功德も増します。
- 定例の御講(常講)以外にも、いろいろな節目に御講を勤めることができます。
- 「我が家は狭いので、御講が受けられない」と言われる方があります。狭い部屋しかなくても、工夫して御講を勤める気持ちから、大勢の方にご弘通の道場を提供できる果報をいただくのです。個人御本尊(懐中御本尊)の方も、最初から「受けられない」と否定せず、「いつか我が家で御講を」という気持ちを持ってご奉公させていただきましょう。
- 御講のお布施は、ご奉公いただいたお教務さんへの報酬や謝礼ではありません。罪障消滅や積功累徳、ご先祖への供養などの「志」を込めて、分に応じた精一杯のご奉公をさせていただきましょう。参詣されたご信者さんへのご供養も同じです。損得勘定を捨て、法華経の行者に対して精一杯の供養させていただきご信心が、我が身の福德を増すと仏典は説いています。金額よりも、そこに籠もる「思い」が大事なことを教えましょう。
- 御講席は上行所伝の要法を学び修する場ですので、開導聖人は「御講席とは高祖大士御出張の御席をもうくる道場也」(扇全7巻310頁)とも仰せです。御講を奉修させていただければ、我が家に上行菩薩のご再来であるお祖師さまがお出ましになり、私たち凡夫に成仏の大法をお授けくださるので、こんな有難いことはありません。この意味を知り、喜んで御講席を受けるご信心が掴めれば、それが着実な育成の成果です。

〔開導聖人御指南〕

真実御弟子旦那の御奉公とは、我も御講を勤め、人の家にも参詣するが御弘通となる也。

(扇全14巻197頁)

〔開導聖人御教歌〕

布施供養こころばかりのことにして 御講つとめよこもかしこも

班長教室 13 お助行の実践

御題目の口唱は、そもそも佛立信心の根幹となる最重要の信行ですから、新入の信徒からベテラン信徒に至るまで、子どもたちもご高齢のご信者も、皆一遍でも多くの口唱に励まなければなりません。ところで開導聖人は、この口唱に「自行化他を具す」（扇全 18 巻 323 頁）と仰せになり、大きく分けると「自分を磨く口唱」と「他の人を利益する口唱」の二種が含まれると教えています。この中で「他の人のための口唱」を鍛え、菩薩心を育てるための日常信行として工夫されたのが本門佛立宗の「お助行」です。佛立信心では、この「お助行」を育成の柱にしています。班長さんは、班内信徒を巡回して共に口唱し、妙法の功德でご信心を育てる工夫を怠ってはなりません。

【お助行について】

- 「助行」はもともと「正行」に対する言葉で、本来の修行を助ける「助縁の行」を意味します。たとえば正しく瞑想するために、心身を浄化することを「助行」と呼んでいましたが、そんな意味では正しく口唱するための妙講一座の拝読が「助行」に当たります。
- 私たちの「お助行」は、開導聖人がこの「助行」という言葉を用いて、相手が正しく口唱できるよう応援するご奉公にされたものです。つまり、御利益を顕すには、何より本人が信心決定して一心に御題目を唱えることが必要ですが、御利益を必要とする人は、病などのいろいろな問題を抱えて心身が疲弊し、ご祈願を続けることが困難なケースもあります。これを周囲のご信者が共に口唱し、支えるのです。
- 助行先のご信者が、妙法の御利益を感得できるようお看経に伺うお助行では、相手のためだけに口唱をします。たとえばお教化の成就を祈る場合、自らの信心向上を目的に集えば「口唱会」と呼ぶのに対して、お教化の出来ない他の組(部)や人を応援するための口唱を「助行」と呼ぶように、お助行は菩薩の化他の口唱を実践する場なのです。
- お助行の種類は多岐に亘ります。職場や家庭内の問題、健康上の問題など個々の苦悩の解決のため、あるいはご信心の育成やご弘通の祈りの実現のため、とにかく「御利益は相手の信心次第」と傍観せず、共に口唱して相手のご信心を励ますのです。
- 育成のための巡回助行は、相手に危機感がない場合も多いので、喜んで受けていただけないこともあります。しかし根負けせず、定期的に「一緒にお看経をさせていただく時間」を持つ努力をしましょう。続ければ、口唱の功德が相手のご信心を変えます。
- 他の人の幸福を願って心を尽くし、時間や労力をかけて御題目をお唱えするお助行は、み仏の御意に叶いますから助行者本人も「菩薩行の功德」を手にしめます。育成のための巡回助行に励んで、自らも妙法の御利益を感得するご信心を目指しましょう。

【開導聖人御指南】

人を助けんが為に身を勞してよろこぶは菩薩の御心也。信行第一とせば御守りあり。(扇全 14 巻 17 頁)

【開導聖人御教歌】

君が為つとめ励むとおもひしが わが身を立るもとにてありけり

班長教室 14 お助行のお席を受ける功德

いざ「お助行に行かせていただく」と思っても、お席を受ける家がない。「今は忙しいから結構です」「家が散らかっているからまた次の機会に」と断られてばかりですと、最初の「やる気」が萎えることもあります。そして、行きやすい家ばかりに偏ると、育成という本来の目的が薄れてきます。ですから根負けせず、「いつかお助行を受けていたたごう」と何度もお勧めするのは基本ですが、「我が家にもお助行に来てください」と言っていたらごう、「お助行を受ける有難さ」をお話しできるようになることも大事です。

頼み込んでご奉公するよりも、自信を持って堂々とお勧めできる信心前に、一步前進することを目指しましょう。

【お助行を受ける有難さ】

- お助行が「有難い」と言われるのは、それが現証のご利益に直結するからです。このことは、ご利益談を見るとよく分かります。困難な病も、生活の上での様々な問題も、多くのご信者がお助行を受けてご利益を得、人生を好転しています。そんなご利益談をお話しし、お助行を受ける結構な功德を教えましょう。
- お助行を受ければ、他のご信者の唱えるご法味が我が家の御宝前に供えられますので、差し迫った問題がない人でも、御法のお陰を感得する機会が増えます。御宝前に少しでも多くの御題目があがるのが、我が身と家族の幸せにつながることを教えましょう。
- お助行に来ていただくと、助行者のご信心に触れ、またお寺のご奉公の話題も耳にします。この刺激は「やる気」を起こすもとになり、良いご信心を育てます。
- 時にはお助行をしてくださった方から、御宝前のお給仕やお荘厳、あるいは普段のご奉公姿勢について折伏を受けることもあります。この折伏は、よりご利益がいただけるご信心になるためのアドバイスですから、それもまた有難いのです。
- 「せっかく来てくださったのだから」とお茶の一杯も差し上げれば、法華經の行者供養の大功德も手にします。もちろん助行者はご供養目当てではなく、御題目で幸せになって欲しいとお助行に来られるので、助行先に迷惑をかけないようにロウソクやお線香も持参される人もあります。しかしそれに甘えて「お互いさま」と油断しては、「功德の積みどころ」を失います。「遠くから来られたのだからお腹が空かないように」と助行者を気遣ってご供養させていただくこと。もし貧しくて出来ないときは、精一杯心で敬うことがご利益につながる(扇全 13 巻 336 頁)と、開導聖人は教えておられます。

【開導聖人御指南】

病家の心得には、助行に来てくだされたる信者を敬い思うこと、高祖御來臨の思いをなすべし。

(扇全 13 巻 336 頁)

【開導聖人御教歌】

法華經の行者に供養する功德 現世に福の報ひをぞ得む

班長教室 15 お助行ご奉公への参加を勧める

お助行のお席が決まったら、いっしょにご奉公のできる人を探して声を掛けましょう。なぜなら、お助行は助行先のご信者のご信心を支援するのが第一の目的ですが、そんな育成の場は、同時にそこに参詣をしたご信者のご信心も育てるからです。

「法は人に依って弘まる」と教わる「弘通の人」は、育成の手をかけることで育ちます。この「育成の手」のかけかたは、御講席や各種の勉強会、寺内ご奉公の機会などで様々な形を持ちますが、口唱による育成を実践する助行席は、素晴らしい育成環境の一つです。そんな意識で班内信徒をお誘いし、お助行のご奉公を進めましょう。

【お助行の将引心得】

- 開導聖人は、信要組の長澤さんというご信者が「お助行に新しいご信者を連れて行って、いっしょにお看経をすると、ご弘通には有効だなあ」と喜ばれるのを書きとめられ、ポイントを「病人さんに自分のご利益を語る」「お助行によるご利益を見て信心増進する」「自分もあのように育てていただいたと育成の労を忘れない」と三つあげられて、「お助行は必ずご利益が生まれます。そんなお助行に新入信徒を連れ参詣し、ご信心を育てるのは、末法のご弘通の急所ですよ」と御指南されています(扇全 18 巻 302 頁)。お助行席という育成の場は、参加したすべての人のご信心を育てるのです。
- ですから、早く口唱の有難さを覚えていただくことが必要な新入信徒や若手のご信者さんは、真っ先に誘いましょう。もちろんベテランのご信者も、化他の口唱を磨き、現証のご利益を軸とした清らかなご信心を持つには、お助行の場を離れてはなりません。懈怠がちな方は、定期的な助行参加が出来るよう注意しましょう。
- お助行にお誘いする人数への配慮も大事です。当病平癒やお教化成就のご祈願は、大勢の口唱が喜ばれる場合が多いでしょう。ベテランのご信者宅のお助行も、賑やかな参詣を喜ぶケースが多いと思います。しかし、お助行に馴れない新入信徒宅や、家庭内のデリケートな問題でお助行を受けるご信者の場合は、必ずしも大勢の参詣が望ましいとは限りません。席主や助行の内容によって、参詣者の調整をしましょう。
- お助行はあくまで席主やその家族が主役です。特に育成を目的としたお助行の場合は、ご奉公者の都合で予定を立てず、席主やその家族が揃う日時にご参詣できる人をお誘いしましょう。席主不在で大勢がお助行させていただいて、自分たちは満足しても、それでは本来の目的を満たしません。皆の予定が合わなければ、自分一人でもお助行させていただく気持ちを持って、相手の都合を優先することを忘れてはなりません。

【開導聖人御指南】

御看経助行には、新教化の人をつれて行くこと御弘通の利あり(中略)末法の弘通、ここにあり。

(扇全 18 巻 302 頁)

【開導聖人御教歌】

助行にはつれてあるけよ新教化 現証を見て信心をます

班長教室 16 謗法の恐さを教える

今回のテキストから、「お助行席で何を教えるか」ということを学んでいきます。

新しくご信心を始める方に、最初に心得ていただきたいのは「謗法の恐さ」です。なぜなら、開導聖人が「籠のつるべに水はたまらず」と譬えられるように、どんなに頑張った功德行も、謗法があれば策で水を汲むような徒労になり、墮獄の因にもなるからです。

謗法払い、時に相手が好んでいたことを否定する場合がありますので、勇気や工夫、熱意が要ります。しかし謗法の観念が育てば、それは同時に純粋な妙法への「信」を磨きます。謗法払いで速やかな現証を顕せば、そのご利益がご信心を確実に育てるのです。

【謗法について】

- 御法に対する雑じり気のない「純粋な信」が、凡夫の心に仏智を映します。この、「純粋な信」を濁らせるものが謗法です。汚れた器にいくら綺麗な水を注いでも、器の中に入った時点で水は汚れます。つまり、仏智を受ける無垢な器を作るのが「謗法払い」なのです。この謗法に、形の謗法、心の謗法、相似の謗法があります。
- 形の謗法というのは、他宗の守り札等、妙法以外の具体的な信仰対象のことです。たとえば、受験や安産に靈験があると聞き、そのお守りを手にすれば、御題目だけでは不安と思う仏説不信の謗法となります。お土産等は気持ちだけいただき、浄火しましょう。
- 心の謗法というのは、他信仰には見向きもしない生粋の信者であっても、心は本気で御法を信じていない状態です。御法のお護りよりも世間の常識を優先する心、少しぐらい手抜きしても…とご信心を怠ける心、「本当に大丈夫？」と妙法を疑う心などがそれに当たります。不養生も「御法のための大事な命」と思えない心の謗法。占いや縁起物が気になるのも「御題目があるから大丈夫」と思えない心の謗法が芽生えています。
- 相似の謗法というのは、実際には謗法を犯していなくても、謗法と紛らわしい行為は避けることです。神社の前で靴紐を結べば、「佛立信者もご神体に頭を下げた」と誤解して見る人があるかも知れません。そんな謂れのない誤解すら「御法に申し訳ない」と避けるのが、御法に対する純粋なご信心の姿なのです。
- もとは信仰の対象だったものが、行事やファッションとして信仰を離れ、私たちの身近にある場合があります。それらの中には、地域の文化や経済を支えるものもありますから、信仰の対象でない分、謗法の判断が難しくなります。が、それらも所詮、御法への思いが篤くなるに従い、自然と避けられるものです。相似の謗法と教えましょう。
- 他の人の謗法を平気で見過ごせば、見過ごす側も「与同罪」で謗法となります。

【開導聖人御指南】

謗法払うて願えば、たちまち御利生を頂く御法なるが故に、実に弘まり易きこと、この上なき大法也。
(扇全 13 卷 2 頁)

【開導聖人御教歌】

謗法をはらひきよめて妙法を たもちそめたるこころわするな

班長教室 17 御宝前へのお給仕の大切さを教える

御宝前へのお給仕は、ご信心の厚薄が映ります。生きてまします御法さまへのお敬いが、お給仕の姿に現れてくれば、そのご信心が現証のご利益を顕すのです。

ですから、より心のこもったお給仕がさせていただけるよう助行席で教えることは、大事な育成のご奉公です。埃だらけの御宝前でも平気なご信心では、ご利益はありません。

〔御宝前へのお給仕について〕

- お敬いは心の問題ですが、その心は「形」、つまり事相から生まれると開導聖人は教えています。お給仕の姿勢、お辞儀の深さ、基本的な作法等、先輩の良いお給仕をお手本として、まずはお給仕の「形」を覚えていただきましょう。
- 御宝前のお給仕は、生きてまします「み仏へのお仕え」です。手を洗い、服装を正し、緊張感をもって臨みます。汚れた手やダラシナイ服装でもご不敬を感じない神経は、ご信心が濁っている証拠です。お給仕中のおしゃべりも不可。御宝前に心を集中します。
- お給仕に使うおハタキやお布巾は専用のもので用意し、お掃除を始めるときに切り火で清めます。おハタキはパタパタ叩くとホコリが舞いますので、上から下へ、奥から手前へと静かにホコリを掃き出します。また、お布巾で御戒壇やお道具をお磨きさせていただく際は、汚れを拭くのではなく、心を磨くつもりで丁寧にお給仕します。
- お掃除が終われば、御宝前のお道具やお供え物を美しくお飾りします。佛丸の入ったお道具は紋が正面に来るように、一対のお道具は左右対称となるように注意します。
- 御宝前には毎朝「お初水」をお供えします。お初水は一日の最初に採らせていただくお水です。近年は生活時間帯も多様化していますが、新たな一日の始まりに、専用の容器に御宝前に供えるお水を採り、それから洗面等の身支度をしてお給仕させていただきます。お初水のお下がりも、お給仕のあと有難くいただきます。
- 炊き上がったご飯は、最初に仏飯器に盛って御宝前にお供えします(お仏飯)。また、珍しいお菓子や果物も、自分たちが食べる前に御宝前にお供えします。その他、新鮮なお花、お灯明、香りの良いお線香も御宝前へのお供えです。心をこめてお給仕します。
- 御宝前を清浄に保つため、お給仕の際には火打ち石を使います。お供え物は供える前に、またお掃除等で私たちが御宝前に触れた最後に、切り火を打って清めます。
- 一番大事なお供えは、「ご法味」と言って口唱の声です。しっかりとお看経のあがる御宝前だからこそ、確かなご守護のあることも教えましょう。

〔開導聖人御指南〕

仏前の掃除、香華、供養等、皆「自然成仏道」と説かれたり。この人、未来世、娑婆に出て菩薩行をせんとき、無量の福德を得て、無病息災にして人を助くべしと説かれたり。(扇全 15 巻 416 頁)

〔開導聖人御教歌〕

仏前の香花灯明ふき掃除 すればわが身の福德と成

班長教室 18 お看経ができるよう教える

仏祖のご本懐を護り、お祖師さまのご本意を継ぐ佛立信者となっても、肝心の御題目口唱が身に付かなければ妙法の功德の有難さを知ることができません。忙しい日常であっても工夫して、日々の口唱が怠りなく勤められるまでお世話をさせていただくのは、最低限の育成ご奉公です。根気よく「お看経の大事」を教えましょう。

〔日常のお看経について〕

- 講有日誠上人は、ご就任以来「よいお看経」の実践を提唱されています。「よいお看経」とは「御本尊をみつめ」「ご弘通を第一にいのり」「一遍でも多く」「姿勢を正し」「大きな声ではっきりと、上行所伝の御題目をお唱えすること」です。自ら実践してお手本を示し、ご講有のご慈教が全信徒に徹底するよう指導しましょう。
- 口唱は「行住坐臥に唱えよ」と教わりますから、時間を見つけていつでも唱えられるようになるのが理想ですが、当面は一日の始まりと終わり、つまり「朝晩のお看経」が出来るようになることを目標にしましょう。朝は一日の無事ご奉公成就を祈り、晩は一日の無事経過を感謝して御題目を唱えるのが、佛立信者の生活です。
- お看経の時間は、お供えさせていただくお線香の一本分が目安で、「お線香〇本のお看経をさせていただいた」とベテラン信徒の会話にも出てきます。せっかくお線香をお供えしても、肝心のご法味があがらないのは本来「もったいない」ことなのです。しかし、お看経に馴れない人、忙しい人には、最初は「五分」「十分」「三十分(約千遍)」等と目標の時間を決め、徐々に長くお看経ができるように教えましょう。
- 一人でお看経ができるよう、言上の練習もしましょう。言上文は御宝前に祈りを届ける言葉ですので、伝統的に厳かな文語体を用いますから、馴れないうちは少し難しいと思います。できるだけ簡略な初心者用の言上文を用意してあげると良いでしょう。
- 「よいお看経」がたくさんあがるよう、拍子木の打ち方も教えましょう。拍子木は左手を胸の位置で軽く支え、右手で一拍子で打ちます。音は大き過ぎず小さ過ぎず。左手の手の平に空洞を作ると良い音がします。頭の上で打つ「拝み打ち」や、左手をヒザに乗せた「ダラダラ打ち」は荘厳味が崩れ、感心しません。皆の口唱が揃うように拍子木を打てば、全員に気持ちよくお看経をしていただく大事なお奉公になると教えましょう。
- お看経は言葉で説明しただけでは出来るようになりません。新入信徒やお看経の習慣がないご信者は、馴れるまでいっしょにお看経をさせていただくのが育成の基本です。たびたび通い、範を示して教えることを心がけましょう。

〔開導聖人御指南〕

とにかくに、信心とは口唱也。口唱即信行也。ほかに利生の道なし。(扇全 16 巻 146 頁)

〔開導聖人御教歌〕

朝夕のつとめは家のいのりなり いそがしくてもこれはやめるな

班長教室 19 ご利益談をお話する

相手のご信心を起こす第一の方法は、現証のご利益の有難さを教えることです。なぜなら、末法の凡夫はどんなに賢くても仏さまの智慧に及びませんので、妙法の不思議な智慧の世界は、目で見、肌で感じて確認する以外に得心できないからです。

ですから、いろんな育成の角度がある中で、ご利益談をお話しし、現証を身近に意識できるよう工夫するのは重要なご奉公です。機会を捉えて現証談をお話ししましょう。

【ご利益談について】

- 現証のご利益というのは、妙法に包まれる功德が顕れて、衆生を利益するものです。この妙法の功德は、行者の信心口唱に感応して顕れます。そして行者の信心は、如説修行による罪障消滅と積功累徳によって磨かれます。つまり、正しい信行の実践という因行の結果が本門佛立宗の教える現証のご利益です。因果関係を見せず、都合よく凡夫の欲心を満たすものをご利益と喜ぶ巷の宗教のそれとは、厳密な違いがあります。
- ご利益談は注意していると、身近にたくさんあります。御法門で紹介されたり、誌上に掲載されたものはもちろん、長くご奉公されたご信者や、一生懸命ご信心に励まれる方にじっくり話を聞けば、皆それぞれに素晴らしい御法のお護りをいただかれていることが分かるはずです。それを覚えて、班内のご信者にお話しするのです。
- 聞いたご利益を忘れない秘訣は、すぐに伝えることです。常に「誰に伝えよう」「どう話そうか」という意識を持って聞くことで、しっかり覚えられると開導聖人は仰せです。妙法の現証は「生きてまします本仏の御法門」とも教わります。「うかうかと聞いてはもったいない」と気持ちを引き締めれば、覚えるのが苦手な人も大丈夫です。
- ご利益談で重要なのは、「良くなった」という結果を生み出す「原因の部分」です。素晴らしいご利益をいただいた人は、「普段どんなご信心をしていたのか」「何を決定し、どんな改良をしたのか」といった「因」の部分をしっかり押さえて伝えることで、相手の方もご信心を向上させるきっかけを得ます。
- 相手の方が現証談に関心を示すようになれば、今度はその方がご利益をいただけるようお折伏をさせていただきます。他の人のご利益談をお手本に、自身のご信心を改良する決定ができれば、そこからご利益を顕す佛立信心がはじまるのです。他のご信者さんのご利益を、自分の信行の糧とする受け止め方も教えましょう。
- 他の人に現証のご利益談をお伝えすれば、自分もまた「転教」の大功德をいただきます。

【開導聖人御指南】

御利益談ほど、有難く信心の起こり、疑いの破るるものはなし。賢愚ともに也。(扇全 14 巻 163 頁)

【開導聖人御教歌】

現証の御利益あればおのづから 人の信ずる妙法の五字

班長教室 20 家族ぐるみのご信心を勧める

家族でご信心ができるようになると、生活の場に励まし合う環境ができ、ご利益が早くなります。もちろん家自体もご信心の徳で良くなります。しかし、今日的な家族は価値観や生活時間帯が多様化し、夫婦や親子間での会話がほとんどないというケースも目立っています。そしてそんな家庭では、家族がご信心を共有するという基本的なことにも、消極的になりがちなのです。

ひとつの家族でありながら、それぞれがバラバラな信仰を持つ家も増えていますが、宗教が違う、即ち人生観が違う者同士が同じ屋根の下で暮らして、良い家族関係を作るのは困難です。真実の妙法を中心に、それぞれが御法の徳をいただく「佛立信者の家族ならではの喜び」を語り、家族にご信心を伝える大切さを教えましょう。

〔家族ぐるみのご信心について〕

- 最も身近な家族への姿勢は、ご信心の厚薄が顕れます。大事なご信心と思えばこそ、大事な家族にも勧めるのです。信行相続を真剣に考えるご信心へと育てましょう。
- 「どうせご信心をしてくれない」「ご信心の話をするとうケンカになる」と最初からあきらめては、家族には絶対にご信心が伝わりません。ご信心の有難さ、大切さを話し続けるという「因」が、時間がかかっても信心相続という「果」を結ぶのです。御法のお力添えを願い、嫌な思いをしても「ご信心の大事を言い続ける」覚悟を教えましょう。
- 家族にご信心を伝える基本は、聴聞した御法門を確実にお話することです。それが佛立信心の内容を教えることになるのはもちろんですが、相手に関心がなくても常にお話しておけば、生活の中で「これが御法門で教わることだな」と思い当たる場面に必ず出会います。そしてそれが、ご信心への関心を持つはじめになるのです。
- 子供たちへの信心相続を助けるのが薫化会や青年会、あるいは寺内行事などの教養会活動です。同世代のご信者の言葉や行動は、時に親の言葉よりも心に響き、子供たちのご信心を育てるケースは多いのです。「どうせ参加しない」と決めつけず、青少年のためのご奉公予定をマメにチェックして、まずは参加を勧めることを教えましょう。
- 周囲のご信者のサポートも大切です。「家庭内のこと」と相手任せにせず、相談に乗り、一緒に将引の工夫を考えましょう。家族以外の第三者からの声かけは、無関心に見えたご主人や奥さん、子供たちの心を動かす、大きな力になるのです。
- 家族が皆、ご信心ができるということは、家中に謗法がないということでもあります。妙法化された家は、穢れのない寂光土です。必ず家が、そして家族が変わります。

〔開導聖人御指南〕

わが手元の折伏教化、大事肝要也。今この講内の家内、皆々大信者になるならば、よほど大勢の弘通となる也。各、ご油断し給うことなかれ。(扇全 3 巻 138 頁)

〔開導聖人御教歌〕

信行の功力によりて家も名も 相続するといふをしらずや

班長教室 21 お教化の大事を教える

本門佛立宗のご信心は、法華経本門八品に説かれる究極の菩薩行を学び、その功德をいただくものです。この菩薩行は、「妙法を我も唱え、人にも勧める」という自行と化他の口唱行に集約されます。ですから、新入のご信者や若手の方も、自己の幸福のためだけにご信心をするのでは困ります。常に「お教化」「ご弘通」の思いを持ち、他の人が妙法の功德をいただく信者となれるよう、ご信心を勧めることは不可欠なのです。

すべてのご信者が「お教化の大事」をよく理解し、ご弘通に励む佛立菩薩へと育成されて、妙法の功德を手にするまで根気よくお世話をさせていただきます。

【お教化について】

- 「お教化は大変なご奉公なので、ベテランの方がするもの」と最初から無関心な人がいます。しかし開導聖人は、お教化に知識や経験は不要と教えています。必要なのはご信心。「この御題目で、より多くの方が救われますように」と願う心を、まずは養うことで「菩薩の仲間入り」を果たします。お教化の出来るご信者へと育つ第一歩です。
- 知識や経験に代わるのは「現証のご利益」です。私たち凡夫は妙法の不思議な力や尊さ、有難さを、目に見えた現証ではじめて知ると教わります。知識や経験に頼るのはどこまでも自力頼み。凡夫の自力でお教化は出来ません。経力による弘通が佛立信心です。
- 自身が現証をいただければ、その喜びは自然とご信心を勧める言葉となって口に出、相手の胸に響きます。口下手でも内気でも、まったく心配は要りません。
- そんな経力をいただき、現証を顕すには口唱行が大事です。普段からご弘通を願う口唱に努めるのはもちろん、お教化成就のために特別なお看経をいただくこと、実際にお折伏に出向く前にもしっかりと御題目を唱えてご祈願することを教えましょう。
- 難しい相手は一人で悩まず、お教務方や先輩信徒の応援をいただくことも教えましょう。また失敗を恐れないのも大事な心得です。真剣なご信心の勧めが、数年先に芽を吹く例もあるのです。
- お教化に励むには、当然時間や労力が必要です。この「他の人のために割いた時間や労力」は、すべて菩薩行の功德として自分に帰ります。お教化のために努力すれば、それも自身のご信心を磨く早道になります。
- 本門佛立宗のご信心は、お教化を中心とした菩薩行を学ぶのですから、年に一個のお教化が成就してこそ「学んだことが活かされている」ことも教えましょう。

【開導聖人御指南】

かえすがえすも信心と申すは御法を弘めんとすることなり。その心なれば、時々刻々によき智慧の出る利生を蒙り候。(扇全 16 卷 155 頁)

【開導聖人御教歌】

信心をすすめんと思ふこころこそ そこが功德のわく処なれ

班長教室 22 外護の功德を教える(お寺の護持、お教務がたの外護)

お金は凡夫にとって、最も執着の対象となるものの一つです。食欲を野放しにして、これに囚われれば、そこに新たな「苦」が生まれるとみ仏は説きます。しかしお金を使って功德を積めば、無量の果報を手にするとも教えています。

お金を上手に使えば、健康や教養が身に付きます。これはご信心も同じです。お金に人格を縛られず、上手に使って功德が積める人へとお育てしましょう。

[財の功德について]

- ご弘通の拠点であるお寺を運営するにも、正しい教えを学び伝えるお教務方に毎日元気でご奉公いただくにも、今の時代は経済的な基盤が重要です。ところで本門佛立宗のお寺やお教務方が、事業収入に頼ったり副業を持たず、ご弘通専一に機能するために浄財で護ることを「外護」と言います。これは単にお寺を経営し、お教務方の生活を守るだけではなく、それがご弘通を支えることに繋がるのですから大きな功德行となります。
- お寺に御有志をするのは、お寺の御宝前をお荘厳させていただくことでもあります。なぜなら、いつ、誰がご参詣しても心が洗われ、ご信心が湧くお寺となるよう、浄財は運用されるからです。また宗外への下種結縁や信徒子弟の信行相続のためにも、十分な予算を割けるのが弘通の法城としての健全な姿でもあります。「余裕がないので何もできない」という状態は、お寺を護る信者の恥。しっかりと外護のご信心を育てましょう。
- お教務方への外護は、み仏のお遣いにご供養させていただくことでもあります。お教務方の生活の心配も大事ですが、開導聖人が「布施は菩提の糧」と仰せのように、我が身の罪障消滅を願って精一杯させていただくのが、外護のご奉公の心得です。
- 外護のご奉公が功德に変わるには、損得等の計算は厳禁です。必要な維持経費を分担する感覚では、どうしても計算が働きます。「外護のご奉公のチャンスを得た」と喜べるご信心を育てることが、身付きの果報を広げます。
- 「お金に余裕があるからする」というだけでは、財のご奉公になりません。余裕があっても人一倍出来るのは結構なことですが、むしろ余裕のない中でやり繰りし、「なんとかさせていただきたい」と工夫する気持ちが大切なことも教えましょう。
- もちろん外護のご奉公は、お金だけでさせていただくではありません。御宝前のお道具や事務所の備品、手作りの野菜やお花、お教務方の法衣など、物品でできるものもいろいろあります。ともかく、常に「自分は何がさせていただけるか」を考え、ご弘通のためにお寺やお教務方をしっかり護るご信心を育てれば、身付きの徳は増すのです。

[開導聖人御指南]

御法のために財を出すは驕りにあらず。果報を増長す。一粒万倍とは是也。俗物はこれを知らず。

(扇全 14 巻 195 頁)

[開導聖人御教歌]

みほとけに供へし徳は身につきて 生々世々にはなれぬときく

班長教室 23 お役をいただく有難さを教える(役中ご奉公のすすめ)

班内のご信者のお世話をさせていただいて、その育成の目標とすべきものの一つは、お役を受けて「役中としてご奉公できるまでに育てる」ことです。なぜなら、いつまでもお世話になるばかりのご信者では、菩薩の信心が身に付いていないからです。

法華経本門に説かれる「菩薩」を目指すのが佛立信心です。この菩薩の徳を身に付けていただくために、班長のご奉公はあります。いつの日か「御法のお役に立つ尊さ」を知り、役中としてご奉公できますよう、班内信徒の育成に励みましょう。

【役中のご奉公について】

- 本門佛立宗では、ご弘通のための役務を頂いてご奉公に責任を持ち、他の方の信心増進のためにお世話をさせていただくご信者を「役中」と言います。役中の「中」は「仲」に通じ、「連中」「社中」などと用いられる「仲間」の意です。つまり、佛立菩薩として共に如来使を勤める仲間が、開導聖人以来の宗門を支える「佛立のお役中さん」です。
- ご奉公にはいろいろな種類があります。当然、得手不得手もあるでしょう。しかし、苦手なものも「御法のため」「我が身の罪障消滅のため」と嫌わずに勤めれば、自身の果報を増し、ご奉公の幅を広げる因になります。ご奉公に好き嫌いは厳禁です。
- それでも忙しいときや体調の悪いときは、自分に不向きと感ずるご奉公は気乗りがしないものです。そんなときは、「お役は御宝前からいただくもの」と教えることが大事です。直接ご奉公の声を掛けてくださるのは御導師や先輩役中さんかも知れませんが、力量があっても、果報のない人にお役は回ってきません。お役を務めるチャンスは、そんな果報に応じて御宝前が与えてくださるのですから、有難く受けるのが信心です。
- 「責任があるだけに、自分の能力では無理」というのも正常な判断です。ただし、最初から何でもできる人は少ないですし、個々の能力には限界があります。その限界を、妙法の功德で補っていただくのがご信心なのですから、お役もまた「お看経で勤める」という心得を忘れてはなりません。自信がないと言う人には、自力頼みでご奉公をする間違いを教え、しっかりと口唱してお役を務めることを教えましょう。
- 大きなご奉公は責任も重く、精神的にも時間的にもたいへんですが、開導聖人は「上役は上役だけの功德大也」と仰せです。功德は信行の苦勞の分だけいただけます。
- ともかく、そんな有難い本門佛立宗のお役中さんになる第一歩として、班長のご奉公があります。まずは数軒のご信者さんを担当し、育成するご奉公をお勧めしましょう。

【開導聖人御指南】

御弘通用をつとむるが故に、現世も諸の難をのがれ、家内無事に今日を営むをもうち忘れゆくは、あさましき次第也。役中それぞれの役義あり。勤めて努むるを思い出と悦ぶべし。(扇全 9 巻 171 頁)

【開導聖人御教歌】

うれしさは人と生れしかひありて みのりのためにけふもくらしつ

班長教室 24 佛立菩薩道の完成を目指す

他の方のご信心の増進を願い、時間をやり繰りしてご奉公させていただき班長は、忙しいお役です。相手の方の信頼を得、困ったときに「すぐ来て欲しい」と言われるまでになれば、それは立派にご奉公が務まっている証ですが、一方で「自分のお看経もままならない」と悩むこともあるでしょう。

しかし「化他即自行」と教わります。法華経本門のご信心は、他の方のために誠心誠意ご奉公させていただきから「菩薩の徳」を手にするのです。班長のご奉公を通して「菩薩の徳」を身にいただき、佛立菩薩として自己を高める喜びを掴みましょう。

〔佛立菩薩について〕

- み仏の教えで衆生を救済し、仏に成る手前まで徳を重ねた人を、仏教では「菩薩」と言います。この「菩薩」になるには、生を隔てた長い時間、計り知れない修行の功徳を重ねることが条件になります。ただし薄徳の凡夫が、そんな膨大な修行の功徳を妙法に包まれたみ仏の智慧で補い、妙法の功力で人々の苦悩を救うという「凡夫のための菩薩行」が法華経には説かれます。この「妙法による菩薩行」の実践者が佛立菩薩です。
- 佛立菩薩の最大の務めは、懈怠・謗法を責め、口唱信行を勧めることです。育成には様々な角度がありますが、最終的には相手のご信者であるか否かにかかわらず、常に勇気を持って罪障を積むことを止め、功徳が積めるよう導く信者を目指すのです。
- そのためにはまず、自身が罪障を積まないよう「改良に励む」癖をつけましょう。穢れなき信心を持つには、常の改良は欠かせません。この改良のモノサシは御法門ですから、どんどん聴聞の場に足を運ぶことから「佛立菩薩道」ははじまります。慢心の自己流は厳禁です。誰でも油断すればすぐに煩惱に負けて、菩薩の心を失います。
- 相手のために、自らが良きご信心の手本となる心掛けも、佛立菩薩となるための大事な心得です。開導聖人は、「上に立つ人のご信心が強ければ、組(部)の永続発展は間違いなし」と教えられました。なんでもオールマイティになるのは困難ですが、口唱も参詣も、お教化、お助行、当番やご有志のご奉公も、とにかくお手本になることを意識して一生懸命に務めれば、その思いが相手のご信心を育てるのです。
- 班長さんは、いろんな役割の役中さんの中でも、様々な苦悩を抱える人々と最も身近に接する位置にあります。つまりそれは、佛立菩薩行の最前線に立っていることを意味します。そんな誇り高いご奉公の中から「佛立菩薩道」を究めれば、そこに高祖のご本意を継ぐ「佛立信者の誉れ」を手に入れます。全力で班長ご奉公に努めましょう。

〔開導聖人御指南〕

妙法蓮華経の極意は、人を助けんと行ずれば、我が身をたすかると云う菩薩行也。これ即ちこの経の御本意也。御弟子旦那、これを信ずべき也。(扇全 14 卷 179 頁)

〔開導聖人御教歌〕

我祖師は如来のつかひかしこくも その眷属はわれら也けり